

四体のあいぼうと未知の友たち
ドーン。大きな音かして私たちは地球を出
発した。うちあげに時間がかかりお腹がすい
てしまった。五時の早い軽食をロボットたち
と食べ終えてロケットそうさ室に向かった。
ロケットのそうさをしているところコンコン
コンと音がしてマースがロケットそうさ室に
入ってきた。
「ワタシがカウリヤシマウカ。」
「ああ、かとうと言ってくれ。私は席をかわった。コ

ースは礼ぎ正しい型ロボットだ。身長は四
〇センチメートルで、主に宇宙船の中で私の
手伝いをしてくれる。頭の上にあるきかいで
まわりの人や物とのきより感を調べられる。
さらに、首と腕は「いざ」という時のために
五〇メートルのびる。これをつかって私たち
かわく星から出られなくなった時引きぱり出
してくれるのだ。
体にはボタンがついていて、カメラボタン
をおすと写真がとれる。地球で帰りを待って

いる人にいちはやくわく星の様子を見てほし
 くて作^ったボタンだ。ちなみにエレベーター
 の上下のようなボタンもあり、上ボタンをお
 すと動く速度が速くなる。下ボタンをおすと
 動く速度がおそくなる。
 マリスはロボットではめずらしくスカート
 をはいている。スカートを利用して、食べ物
 や電池など必要な物をたくさんしま^っておけ
 る。

マリスはロケットを火星へと進めてい^った。
 言いわすれていたけれど、私たちは火星の生
 き物を探^す探査チームだ。私は生き物が好き
 だ。だから動物園にいるキリンやゾウは大半見
 た。だからまだ見た事のない生物を地球に持
 ち帰^って一緒に暮らし、地球の人びとも見
 せてあげたいのだ。どんな生物に会えるか
 キドキで心がい^っはいだ。出発前夜、私はベ
 ッドの中で目をキラキラとかかやかせて全く
 ねむれなかつた。だから夜十時ごろに母が目を
 光らせたのを合図にねむ^ったのかきおくにの

こゝにいる。
 シュー。話している間にロケットかとう着
 したようだ。火星に進む前に二ヶ目のロボッ
 トをしよう介しておかないといけない。二つ
 目のロボットは三体いる。チビ調査隊のコロ
 ロン、ゴロン、コロゴンだ。名前のとおり
 くるくる回るタイヤかどくちやうだ。身長は
 三〇センチメートルだ。主に火星で生物の調
 査を手伝ってくれる。つまりマーヌは宇宙船
 の中のあいぼう、チビ調査隊は宇宙船の外の

あいぼうみたいなことだ。
 チビ調査隊はみんなニコニコ顔でおなかの
 あたりに穴か空いている。息を吹き込むと穴
 が広がり、その中に生物を一時的に入れてお
 くことができる。

体の下はあるボタンをおすと人間の会話が
 通じるようになる。前と言うと前進する。前
 進した後はわかれ道以外自分で進んでくれ
 る。後ろと言うとゆづくり後ろに移動する。

火星をドリルでけずっていく。ガーカー。

しばらくは耳せんをしておこう。ガィガィ。
 十分ほどたつて火星工事は終わつた。はぐれ
 ないよになわをつけておく。前にコロロン、
 ゴロロンかいて生物加いか、危険かない
 かをかくにんする。その後、私の後ろに
 コロゴンかいて生物を見逃していかかく
 たんする。
 コロロン、ゴロロン、コロゴンたちのスイ
 ッチを入れてまちにまつた探査が始まる。火
 星の中に入るとどい今まで感じたことのない不
 思議な気分になるた。しかし、火星に入つて
 三時間たつても生物は見つからない。私は「
 はあ、」とため息をついた。
 次のしゅん間、
 「セイブツハツケン！」
 といふコロロンの黄金の音が聞こえた。つ
 かまえた生物は、とにかく真白だ。オコシ
 ヨくらいの本長で、しほはヒョウのよ
 長い。私かぼししている間にコロロンはも
 うおなかの穴に生物を入れたようだ。

もどろうとしたか気づいたはずいぶんロケットからはなれていた。そこで無線でマースをよんだ。『おするする』とマースの腕かのび私たちはふじ助けられた。

ロケットの中に入ると真先に生物を、生物飼育スペースに入れた。

私は生物を見つけたコロロンにちなんで生物の名前をコロロにすることにしたらマースはカメラでコロロの写真さっえいを行っている。『モウカグソウシンシマス。』

地球の人びとがっいに火星の生物を見られる。『ここにす』

『アート5ビョウデソウシンデス。』

みんなが声をそろえてさけぶ。

五・四・三・二・一！その時おてんばがロカビョーンとジャンプして、送信ボタンをおした。

ポン。